

個々の実態に応じた指導実践に関する研究

～授業研究会における話し合いを通して～

池田 智帆・石崎 美津希・小柳 達朗・佐藤 文昭・澤田 真喜子・柴田 空真・須藤 広代
杉本 真美・杉山 砂寿・土手 信・林 徳子・森 敬子・山縣 浅日・山中 健二

本研究では、部内授業研究会で話し合われた話題の記録を、5項目（子どもの実態と配慮、やりとり、言葉、指導技術、その他）に分類し、全年齢における各項目の割合を示した。また、特徴的となった項目および各年齢の事例の話し合いの記録から、子どもとかわる上での配慮事項や指導方法について検討した。その結果、全年齢の割合については、「指導技術」が30%、「やりとり」が26%、「子どもの実態と配慮」が19%、「言葉（受容面・表出面）」が14%、「その他」が11%であった。割合が最も高かった「指導技術」には、「口声模倣」「間を取る」といった話題が出た。各年齢の事例の話し合いについては、授業を互いに見合う機会が少ない中で、他の教師からの質問や意見が個々の研鑽を積む良い機会となった。また、経験年数に限らず、全体で話し合えたことで、聴覚障害教育に関する専門性の確認や向上、継承につながる研修につながった。

キー・ワード：子どもの実態 配慮 やりとり 幼稚園教育 授業研究会

1 はじめに

幼児は、身近な大人との信頼関係を基礎としながら生活経験を積み重ね、言葉を身につけていく。幼児一人ひとりが、聴覚を活用しながら生き生きと学校生活を送っていくために、教師には個々の実態を的確に掴み、それに応じたかわりを繰り返し積み重ねていくことが求められる。

幼稚園では、専門性の継承および向上として、長年、授業研究会を行ってきた。全教師が当該学級で活動を参観し、その後の研究会では、授業者が、活動の中で見られたかわりのねらいや、これまで行ってきた実践を説明したり、複数の経験豊かな教師が、それぞれの経験に基づいた手立てを話すのを聞いたりしてきた。これらは、個々の実態に柔軟に応じるための視点を養い、幼児の気持ちの動きに合わせて臨機応変に活動を組み立てる手立てを考える貴重な機会と言えた。

コロナ禍にあって、ここ数年は、活動形態や参観、研究会開催の方法を変更せざるを得ない状況が続いた。これまでの授業研究会を経験している教師からも、経験したことのない教師からも「実践を通じた学びの機会が欲しい。」「自分の学級で困っていることについて、他の先生だったらどうするかを知りたい。」とい

う声が聞かれるようになった。経験を問わず、幼稚園全教師で一つの活動について話題を共有する意義は非常に大きいと考えられた。

そこで、今年度、教室での参観を動画の視聴に変更し、授業研究会を行うこととした。さらに、授業研究会で共有された話題をまとめ、聴覚障害を有する幼児とかわる時に必要な視点や指導技術を深め、さらに幼稚園の教師全員の専門性の向上につなげていきたいと考えた。

2 目的

幼稚園授業研究会の中で、話題となった点や確認した点を分析し、子どもの実態に応じた配慮事項や指導方法について検討する。また、指導実践の考え方に触れ、日々の実践に活かす。これにより、今後の聴覚障害教育のための有益な基礎的資料が得られると考えられる。

3 方法

(1) 対象

担任教師6名の授業研究会の話し合いの記録を分析の対象とする。

(2) 実施日

授業研究会は、令和4年5月から10月までに、計3回（1回につき授業者2人）行った。具体的な実施日と年齢については、Table 1に示す。

Table 1 授業研究会の実施日と年齢

実施日	年齢
令和4年5月26日	4歳児
	5歳児
令和4年9月23日	5歳児
	3歳児
令和4年10月18日	4歳児
	3歳児

研究授業については、従来、幼稚部の教師全員で実際の授業を直接参観し、当日もしくは後日に授業研究会を行っていた。しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染症対策として、授業を録画したもの（約20分間）を後日全員で視聴し、その翌日に各授業者につき約40分間の授業研究会を行った。研究会では、授業者からの補足説明や反省、指導案についての確認、授業についての質疑応答や話し合いという内容で話し合いを進めた。

(3) 分析方法

- ① 授業研究会の話し合いの記録を概観して、話題として多く上げられた5項目（子どもの実態と配慮、やりとり、言葉、指導技術、その他）を設定する。
- ② 各授業研究会の記録を担当した教師が、記録をもとに話し合われた内容を①の5項目に分類し箇条書きで書き出す。当てはまる項目が複数であると考えられる場合は、該当する各項目に同じ文言で書き出す。
- ③ ②で書き出したものをもとに、授業研究会で話し合われた話題について全年齢における各項目の割合を示す。また、年齢ごとの各項目の内容をまとめて明らかにする。
- ④ ③の結果、特徴的となった項目および各年齢の事例の話し合いの記録から、子どもとかかわる上での配慮事項や指導方法について検討し、考察する。

4 結果

(1) 授業研究会で話し合われた話題について

全年齢における各項目の割合を Fig. 1 に示した。

また、各項目に分類された年齢ごとの内容について Table 2 に示した。

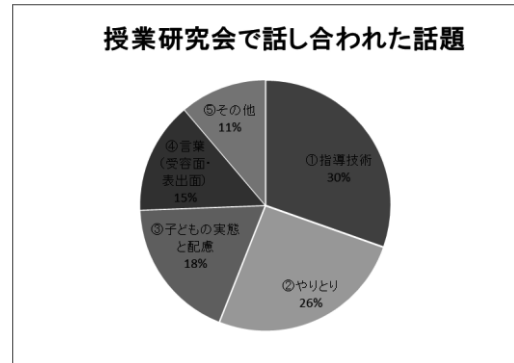


Fig. 1 授業研究会で話し合われた話題の割合

授業研究会で話し合われた話題の割合は、「①指導技術」が30%、「②やりとり」が26%、「③子どもの実態と配慮」が19%、「④言葉（受容面・表出面）」が14%、「⑤その他」が11%であった。

(2) 3事例の話し合いの記録について

各年齢の授業研究会の記録から、授業者の反省および質疑応答や話し合いの内容を以下にまとめた。

① 3歳児の授業についての話し合い

授業者からは、「入学当初と比べて子どもたちは落ち着いてきたが、気ままな動きをしている。今後は、子どもの思いを受け止めた上で、『今は〇〇しないよ。』などと伝えていきたい。また、一人の子どもの思いを取り上げることが中心であったため、他の子どもの思いもより取り上げていきたい。」という反省があった。

それに対して、同じ学年の教師から「活動中に子どもたちが動き回るけれど、教師が子どもを呼ぶと戻ってくるのが羨ましいと思った。子どもが動いた所に教師が動くといったようだったが、自分の学級では、教師が動くとき子どもたち全員が動いてしまい散らばってしまう。」という感想があった。授業者は、「子どもが何をしに行っているかわかる時は待てる。わからない時は見に行く。」などの回答があった。

例えば、「3歳児は興味がよく変わる。」「子どもの気持ちをくんでいた。」「言葉にならない気持ちを身体を使ってよく聞いてあげていた。」「一学期に魅力的なことをして先生と子どもの関係づくりをしていることがわかった。」「オーバーアクションで子どもの気をよく引き付けていたが、大事なアプローチだと思う。」「子どもが楽しいと思うことがベースにならなく

てはいけない。」などといった、前向きな話が多く出された。子どもと教師の関係をつくっていくための取り組みや工夫について、全体で確認することができた。

一方で、授業者の子どもとのやりとりについての意見が多数出された。例えば、「教師の声ばかり聞こえるため、子どもの様子をよく見たり、反応を待ったりするとよい。」「子どもが教師の言葉を聞いて言われたことがわかるまで時間がかかることがある。」「教師は子どもに投げかけた言葉を子どもがどう捉えるかを考えることで慌てなくて済むのではないか。」「人工内耳を装用するなど、聴覚をよく活用する子どもがいる

中で、子どもとのやりとりにおいては、子どもの反応を見てから、次のことを言うといったことが大切だと思う。間がないと話を中途半端に聞いてしまうのではないか。」などと、間を取ることの重要性についての意見が多くあった。また、「子どもが教師を見ていない時に話している。教師も子どもも相手を見て話す習慣を付けていくことが必要である。」と、傾聴態度を育てていくことの必要性についての意見もあった。

3歳児の授業についての話し合いを通して、以下のことを全体で確認した。

Table 2 年齢ごとの各項目の内容

項目	年齢	内容の例
子どもの実態と配慮	3歳児	・年齢に捉われずに実態に応じてかわる。 ・子どもの性格やその時の状況に合わせて、子どもの気持ちに共感したり、子どもにわかる長さで話したりする。 ・子どもの興味に合わせて教師も一緒に見たり動いたりする。
	4歳児	・相手の口元が見える位置に座らせるようにする。 ・言葉の表出面や理解面などの実態把握を行う。 ・子どもに言葉を投げかけた時の反応からその子どもに合う言葉の長さなどを掴んでいく。
	5歳児	・子どもが使える表現方法を引き出すために、写真などの視覚的な手がかりを用いて表現を促す。 ・話し合いの内容がわかっているか確認するため、写真やイラストを子どもに貼らせたり選ばせたりする。 ・聴力や言葉の力などの実態差が大きい集団での話し合いは難しさがあるが、傾聴態度を育てることで、教師や友達が話すのを見て聞いたり、話し終わるまで待ったりするようになった。
やりとり (教師と子ども・子ども同士 のやりとりに教師 が介入するなど)	3歳児	・子どもの発想を取り上げて、他の子どもにも知らせていく。 ・子どもも教師も互いに見合って最後まで話を聞こうとする。 ・やりとりの中で、子どもに伝わるように身体を使ってたくさんかわる。
	4歳児	・教師が話題を提起した後に、子どもからいろいろな話題が出てくるなど、話題が変わっていった。 ・子どもの表出から、表出しきれない気持ちも汲み取る必要がある。 ・子どもが思ったことを教師に伝えて、教師にわかってもらおうということが日常になっている。
	5歳児	・全員で話題を共有できるように、参加できていない子にも視覚的な手がかりを用いながら内容を伝えていく。 ・子ども同士のやりとりを大事にするため、教師が介入しすぎず、見守ったり子どもの反応を待ったりする。場合によっては、子どもに「どう思ったの?」と子どもに質問して、考えを引き出す。 ・やりとりを成立させていくために、子どもに言葉だけでなく身振りや音韻サインも付けるように促す。
言葉 (受容・表出)	3歳児	・子どものイメージや体験に基づいた場面の想起とイメージに合った言葉かけが必要である。 ・子どもの気持ちに応じた言葉かけや気持ちのこもった言葉かけが大事である。 ・子どもに最後まで話し切れるために何ができるかを考える必要がある。
	4歳児	・子どもの表現を言葉に置き換えて聞かせたり言わせたりしていくことが必要である。子どもが自分の言葉で「言い切った」「伝えた」という達成感を味わえるようにする。 ・教師は子どもに「大丈夫?」と言葉をかけるが、具体的な言い方で聞かせて、子どもに具体的に答えてもらうと良い。 ・子どもの「やだ。」などといった一言にどのようなことが含まれているか確認して表現させていくことが必要である。
	5歳児	・子どもの言葉の力に合わせて、子どもの気持ちを文で表出させることが必要である。 ・3歳児の時は、子どもの気持ちに共感して、表情や指さし、身振り、言葉などで全員にわかるように応じた。4歳児でも、子どもの気持ちをくみ取り、一人一人が教師にわかってもらえたと実感できるように、言葉や声に身振りや表情などを付けて応じた。
指導技術 (視覚的支援 (写真・ 絵・身振り・音韻サ イン・板書など)、口 声模倣、発音誘導、 間を取るなど)	3歳児	・教師の話を子どもがどう捉えたかを見たり待ったりすると良い。 ・子どもが動いて楽しめるようなことや動きたくするようなことを準備したり、子どもの動きを想定したりする。 ・オーバーアクションで子どもの気を引き付ける。 ・全員で話題を共有できそうな時は絵を描くなどする。
	4歳児	・「よく見ているね。」など、子どもを認めたり、褒めたりする言葉かけや子どもの見方が良い。 ・口声模倣を誘って子どもが難しくしている時に、終わりにさせる判断が鈍ることがあるため、模倣させる回数にこだわらないようにする。 ・発音が曖昧な部分は、よく聞いてわかってあげることが大切である。 ・子どもが言ったことと同じことを言って聞かせていた。子どもは自分が言ったことをそのまま受け取ってくれたと実感できる。
	5歳児	・子どもが考える時間を作ったり子どもの反応を待ったりするため、あえて間を取って様子を見る。 ・話し合いをするにあたり、全員がわかるだろう話題を選択し取り上げる。また、視覚的な手がかりを用いて、話し合いの参加を促したり理解を図ったりする。また、確認をする。 ・子ども同士のやりとりの中で、友達の話聞きたいと思わせるような手本となるやりとりや言葉かけが必要である。
その他	3歳児	・母親にその場で子どもの様子や指導の意図を話せない時は、メモを取っておき、後で伝えるなどの工夫をする。 ・母親も活動に参加し、子どもと楽しめるようにすることで、日常生活にも活かせる。 ・名札付けなどの活動の中で、親子でのやりとりにもつながるといった視点をもって子どもにかかわり、母親に見せる。
	4歳児	・保護者への指導の意図の説明は、昼食時や保護者からの記録用紙に返事を書くなどタイミングを見て説明する。
	5歳児	・話し合いの中で、子ども同士のやりとりを成立させたり、教師もその話し合いに積極的に参加してやりとりを楽しんだりするといった教師の役割をどうするか。

- ・年齢に捉われずに子どもの実態に応じてかかわっていくこと
- ・傾聴態度を育てていくこと
- ・間を取りながら子どもとやりとりをしていくこと

② 4歳児の授業についての話し合い

授業者からは、「今年度に入ってから、子どもたちはわかることが増え、子どもからの発信が増えている。また、自己主張が強くなってきている様子も増えている。それぞれの子どもに合った言葉かけや口声模倣がうまくできなかつた。」などといった反省があった。

それに対して、「子どもの気持ちや様子に合わせて活動を進めていたと思う。」「子どもたちは思ったことを教師に伝えてわかってもらうということが日常になっていると思う。どの子の顔を見ても満足感があつたと思う。」「全員が活動に参加しているやりとりだと思った。」「『よく見ているね。』などといった言葉かけを見習いたい。」「子どもを褒めたり認めたりすることで、子どもが自分からより言ってきたりやったりすることにつながっていくと思う。」などといった感想が出た。

一方で、「単語で言ってきた時に文で言わせたり、口声模倣を誘ったりするなど、子どもにしっかりと知らせる場面がよりあつても良かったと思う。」「子どもが傾いた壁面飾りを見て、「走って、タタタ、バン。」と、助走を付けて跳んだら届くというようなことを言った時に、教師は子どもが言ったことと同じことを言って聞かせていた。子どもは自分が言ったことをそのまま受け取ってくれたと実感できたのではないか。今後は、適切な言葉に置き換えていかなければならない。」という意見も出た。

それらに対して授業者から、これまでのその子とのやりとりの様子から、今回はその子の思いを受け止めたかつたため、あえて口声模倣を誘わなかつたという意図の説明があつた。また、「その時に文で言わせたり、口声模倣を誘ったりしなかつたが、言ってほしいことやしてほしいことを本人に伝えてきている。」との話もあつた。

4歳児の授業についての話し合いを通して、以下のことを全体で確認した。

- ・子どもの気持ちや様子に応じて活動を進めること。

- ・口声模倣に関する考え方
- ・子どもを褒めたり認めたりすることで、子どもからの表現が増えていくこと

③ 5歳児の授業についての話し合い

授業者からは、「運動会の紅白決めの話を全員で共有できるように、写真カードやイラストを使いながら進めた。しかし、子どもとのやりとりの中で、どちらの組になりたいか悩んだり迷ったりしている気持ちや、一度は紅組と言った子が白組でいいと言った時の理由を具体的に聞くべきであつた。」などといった反省があつた。

それに対して、「子ども同士のやりとりがより見られる話し合いにする方がよい。」「話し合いへの参加が難しい子を巻き込みながら、一人一人の気持ちをくんで適切な言葉で表現させるべきだつた。」「話し合いは、子ども同士のやりとりを大事にしながら、教師がどういうふうにかかわれるかが大事である。子ども同士のやりとりを見守る部分と、「どう思ったの？」などと子どもに尋ねて考えを引き出すことも大事である。」「話し合いで、子どもに何を育てたいか、そのためにどのようにかかわるべきかをより考える必要がある。教師が話し合いに入りすぎるのはよくない。」という意見が出た。

他の教師からは、「子どもたちが紅組になりたいと言ったり、白組になりたいと言ったりして決まらない時などの膠着した時間に授業者は何を考えているか。」という質問があつた。

それらに対して授業者からは、「まずは、話し合っている内容がわかっているか、子どもの気持ちと合っているかを確認するために、黒板に絵を描いたり、顔写真や実物の紅白帽子を使ったりして話をしていく。その上で、教師から子どもたちに『こうしたほうがいいんじゃない?』などと、答えをすぐに出さないようにして、子どもに考える時間を作っている。」という回答があつた。

また、子どもたちが自分で思ったことや考えたことを話せるようになってきた経緯に関して、3歳児から5歳児までの各年齢でどのような取り組みをしてきたかということについて、「3歳児では、子どもとの関係づくりをするために、子どもの気持ちに共感して、

表情や指さし、身振り、言葉などで全員にわかるように応じてきた。4歳児では、子ども同士でうまく気持ちを伝え合えない様子が見られていたため、子どもの気持ちをくみ取り、一人一人が教師にわかってもらえたと実感できるように、言葉や声に身振りや表情などを付けて応じてきた。5歳児では、思ったことや考えたことが友達に伝わるように、ゆっくり話したり、身振りを付けたりするなど、伝え方を工夫するように促してきた。また、相手の話を聞いてわからなかった時に『もう一回言って。』などと聞き返したり、友達に確かめたりするように促してきた。」と説明があった。

5歳児の授業についての話し合いを通して、以下のことを全体で確認した。

- ・間を取って子どもに考える時間を作ること。
- ・3歳児では、子どもの気持ちに共感して関係づくりを行ったこと
- ・4歳児では、子どもの気持ちをくみ取って、言いたいことが教師にわかってもらえたと実感できるように応じてきたこと
- ・5歳児では、友達に伝わるように伝え方に工夫するように促してきたこと。相手の話がわからなかった時に、自分から聞き返したり、確かめたりするように促してきたこと

5 考察

授業研究会で話し合われた話題について、Fig. 1で示した全年齢における各項目の割合で特徴的だった「指導技術」「やりとり」「子どもの実態と配慮」の項目について、また、Table 2で示した各項目に分類された年齢ごとの内容をまとめた結果について考察する。また、3事例（各年齢の授業研究会）の話し合いの記録から、子どもとかわる時の配慮事項や指導方法について考察する。

(1) 授業研究会で話し合われた特徴的な話題について

① 全年齢における各項目の割合について

授業研究会で話し合われた話題の割合を見ると、割合が高い順に「①指導技術」が30%、「②やりとり」が26%、「③子どもの実態と配慮」が19%であった。この結果から、今回の授業研究会での話し合いでは、

子どもの「言葉」に関する内容に比して、言葉を育てるために関連する「指導技術」や「やりとり」に関する話し合いがより多かったことがわかった。また、次に多かった「子どもの実態と配慮」の話題の中では、教師は子どもの実態に応じたやりとりに関する話し合いが多かった。また、その中で、傾聴態度を育てたり、子どもの反応を待つために間を取ったりするなどの重要性を感じていることが窺えた。

② 「指導技術」「やりとり」「子どもの実態と配慮」の項目について

「指導技術」については、3歳児で、「教師の話を子どもがどう捉えたかを見たり待ったりすると良い。」という内容があった。これは、「間を取る」ということだと考えられる。5歳児でも「子どもが考える時間を作ったり子どもの反応を待ったりするため、あえて間を取って様子を見る。」という「間を取る」ことについての内容があった。このことから、子どもへの指導の際に「間を取る」という配慮は、3歳児でも5歳児でも必要であることがわかった。筑波大学附属聾学校・幼稚部（2004）は、「持っている言葉を駆使して何とか考えて表現する習慣を身に付けるために、ゆっくり考える時間を与えて、子どもを見守り励ますように教師自身が気を付けたい。」と述べており、間を取って子どもの表現を待ったり促したりすること、子どもに考える時間を作ることが重要だと考える。

一方、4歳児の話し合いで話題になった口声模倣について話し合う中で、聴覚障害児教育の専門性を確認したり高めたりしていくことにつながった。口声模倣について、岡（1981）は、指導する側に「いくつかの知識や技能が必要となる」と述べ、庄司（2016）は、「単に音声言語の語彙を習得する方法として重要なだけでなく、日本語の基本的な体系を身につけることに有効な方法である」と述べており、口声模倣の専門的な指導技術の必要性と、口声模倣が日本語を身に付けるための役立つ手段であることがわかる。実際の授業実践の中で口声模倣を誘う際、子どもが言いたいことをきちんと表しているかといったことの他に、子どもの受容面と表出面における言葉の力も把握しておかなければならない。また、要求している言葉や文を子どもが最後まで言えずに難しく感じている場合に

は、文を短くしたり簡単な言葉に置き換えたりする、モデルの文や言葉を聞かせて終わりにするなど、対応する上でのタイミングや判断が必要になり、教師の力量も問われる。今回の話し合いの中で、間を取ることや口声模倣に関するることなどの指導技術に関する話題を幼稚部全体で確認できたことは、専門性について研鑽するよい機会になったと考える。

「やりとり」については、3歳児では、教師と子どもとのやりとりが中心で、きちんと相手を見て聞いたり話したりすること、教師は子どもに伝わるように身体も使って話したりすることが大事であるといった内容であった。教師から子どもに対しての発信に関する内容から、4歳児では、子どもが教師に対して発信し、その発信を教師にわかってもらうといった内容になっていた。さらに、5歳児は、子ども同士でのやりとりに関する内容が多くなっていった。このことから、「やりとり」については、教師と子どもとのやりとりから、次第に子ども同士のやりとりに重きを置くようになっていくことがわかった。話し合いを通して、子どもたちの話し言葉によるやりとりの力を育てることを大きなねらいの一つとして取り組んでいるが、話し合いをするには3歳児からの子どもの実態に応じた指導は欠かせない。3歳児段階では、目の前で起きたことや具体物を中心に話題の選択をするなど、子どもの興味や関心、気付きに合わせて取り上げるようにする。そして、全体の話題として扱えるように黒板に絵を描いたり、他の子にも目を向けるよう声をかけて促したりしながら、目の前にある身近な話題を全員で楽しくやりとりする必要がある。4歳児段階では、自分の思ったことや経験したことを教師や友達に伝えさせるために、教師は、子どもの言いたいことを言葉にして置き換えて聞かせたり口声模倣を誘ったりすること、他の子にも話されていることがわかるように絵を描いたり辞典を見せたりなどして話題を共有できるようにすることを通して、基礎的な日本語の力を育てる取り組みが必要である。このような取り組みと子どもの成長があって、5歳児の話し合いに臨めるようになっていくと考える。

「子どもの実態と配慮」については、3歳児では、

子どもの気持ちや興味に合わせて教師も動くといった内容があった。4歳児では、言葉に関する内容が多かった。5歳児では、話し合いの中での配慮や傾聴態度についての内容が中心であった。この結果から、各学年で子どもの実態に応じた配慮について重視していることが明らかになった。

(2) 3事例の話し合いの記録について

3事例の話し合いの記録の中の「指導技術」「やりとり」「子どもの実態と配慮」の項目に特徴的だった内容と、子どものかかわりの上での配慮事項や指導方法について考察する。

① 3歳児の授業についての話し合いについて

3歳児担任の教師は、幼稚部での担任が初めてである。3歳児の授業についての話し合いの中で、同じ学年の教師から、「活動中に子どもたちが動き回るけれど、教師が子どもを呼ぶと戻ってくるのが羨ましいと思った。子どもが動いた所に教師が動くといったようだったが、自分の学級では、教師が動く子どもたち全員が動いてしまい散らばってしまう。」との感想が出た。

筑波大学附属聾学校・幼稚部(2004)は、「幼稚部3年間の子どもの姿」の中で、3歳児の7月頃の姿として、「教室で母親から離れて活動することに慣れ、担任が誘うと母親の側にいても自分から担任の周りに集まって来る。」「母親から離れたがらなかつたり、担任の側に集まった後に母親のところに戻ったりすることもある。」と、「人間関係」の項で述べており、9月に実施された授業として、今回の子どもたちの姿は妥当であると思われる。また、文部科学省(2018)によると、「幼児期は発達上の実態差が大きい時期であり、特に、3歳児はそれが顕著であるため、それぞれの実態差を踏まえて教育を行っていく必要がある。」と言われている。このような傾向は、聴覚障害児にも見られ、聴覚障害児は聴児よりもはるかに個人の実態差が大きいことが指摘されている(Harry Knors & Marc Marschark, 2014)。これらのことから、今回幼稚部全体で確認したように、子どもの実態に応じてかわることは重要であると言える。

話し合いの中で、間を取ることも確認した。子どもとやりとりをしていくことについては、5 考

察の(1)の②で、「指導技術」の項目の内容をまとめた結果について述べたように、やりとりの中で間を取ることで、子どもの表現を待ったり促したりすること、子どもに考える時間を作ることにつながる。授業研究会の中で、間を取る必要があるとの意見が多数出た。

また、傾聴態度を育てていくことも大事だと確認した。筑波大学附属聾学校・幼稚部(2004)は、「傾聴態度とは、相手からの話しかけに耳を傾けること、自分の心を相手に向けて傾け、何を言おうとしているかをわかってほしい姿勢である。」「まずは、相手の思いに自分の思いを添わせ、相手の気持ちを知りたいと思う心を何よりも大事に育てたい。」としている。そのためには、遊びや生活の中で、教師が子どもの気持ちに共感し、声や表情、指さしや身振り、言葉などで応じていくことで、子どもが相手に自分の思いが伝わった、わかってもらえた実感できるように取り組んでいく必要がある。このように、子どもも大人も互いにわかり合える関係をつくっていくことが重要である。そして、傾聴態度を育てるには、筑波大学附属聾学校・幼稚部(2004)は、「話しかけられた言葉の意味や話の内容を子どもが知る必要がある。わからなかった言葉の意味や話の内容を身振りや写真その他の手がかりを使って伝え、改めて話し直す。話の内容がわかった状態で聞く時が、傾聴態度を身に付けるのにも、言葉を記号として覚えるのにも大切だ。」と、述べている。以上のことから、子どもと教師の人間関係をつくるための実態に応じたやりとりは、子どもの傾聴態度を育てていくことにつながると考える。

② 4歳児の授業についての話し合いについて

4歳児の授業についての話し合いの中で、子どもの気持ちや様子に合わせて活動を進めることが大事だと全体で確認したが、4歳児でも子どもの実態に応じた配慮を大事にしていることがわかった。活動を進めていくことに捉われず、活動の中で子どもの行動をよく見たり話をよく聞いたりすることは大事である。4歳児では、子どもの気持ちを大事にしながら、その気持ちを言葉に置き換えていくといった言葉に関する話題が多く出た。

授業者から口声模倣についての反省があったこと

で、他の教師から口声模倣に関する感想や意見が出た。話し合いを通して、あえて口声模倣を誘わないという教師の意図があることがわかった。これも口声模倣に関する専門的な指導技術に含まれると考える。教師は、その都度子どもが何を考えていて何を言いたいかわかる必要があるが、常に口声模倣を誘っていくわけではない。子どもとのやりとりや、子ども同士でのやりとりの中で、子どもの助詞や語順が間違っていたり、言葉が不足したりしている時でもやりとりの流れを優先させるために、口声模倣を誘わないことがある。また、子どもが自分で言いたいことを最後まで言い切ったと実感させるために口声模倣を誘わないこともある。しかし、子どもに日本語を身に付けさせるための一つの方法であることに変わりなく、その都度教師は、意図をもって指導にあたらなければならない。時に、やりとりの流れを止めてまでもして、子どもに日本語を身に付けさせるために、口声模倣を誘っていく必要もあるだろう。今回、口声模倣に関する話し合いを通して、その重要性を確認すると共に、あえて口声模倣を誘わないという意図があることも全体で確認できたのは専門性を学ぶことにつながったと考える。

また、授業者から、「自己主張が強くなってきている様子も増えている。」との話があったが、筑波大学附属聾学校・幼稚部(2004)は、4歳児の大まかな育ちの中で、「自己主張が強くなるあまり、気持ちのコントロールがうまくできずに感情的に走るなど、気持ちの揺れの大きい時期でもある。」と述べている。このことから、今回の子どもたちの姿は妥当であると思われる。

授業者は、自己主張の強い子どもたちの気持ちをくみながらよく話を聞いていた。具体的には、教室の壁面飾りが傾いていることに気付いた子どもが教師に知らせていた場面があった。教師は、教室の上部に飾られている壁面飾りには届かないことを身体を使いながら伝えると、子どもが「走って、タタタ、バン。」と、助走を付けて跳んだら壁面飾りに届くのではないかというようなことを言った。教師は「それはいいね。」と認めたり、その子どもが言ったことと同じ言葉(「走って、タタタ、バン、ってしたら届くかな。」)を使っ

て言って聞かせたりしていた。このやりとりを見た他の教師から、話し合いの中で、子どもは自分が言ったことをそのまま受け取ってくれたと実感できたのではないかとの感想が出た。その他の場面でも、子どもが教師を見て話を聞いている時に「よく見ているね。」と褒める様子も見られていた。このようなやりとりを通して、子どもは自分の言ったことや行動が認められることで満足感や自信をもつことができるようになり、さらに主体的な表現が出てくると考えられる。

一方で、適切な言葉に置き換えていかなければならない意見も出ていた。筑波大学附属聾学校・幼稚部(2004)は、4歳児の大まかな育ちの中で、「表現意欲が高まり、印象的だったことや自分がしたいことなどを、知っている言葉をつなげて話そうとする。また、いくつかの文をつないで話そうとするようになる。」と述べている。このことから、子どもは認められたり褒められたりすることを通して、自分から表現することが増えていると思われる。今後は、先述した「走って、タタタ、バン。」という子どもの擬態語・擬音語や不十分な文を「跳ぶ。」「ジャンプする。」「走って跳ぶ。そうしたら、届く。」「走って跳んだら届く。」などといった子どもの実態に応じた適切な言葉に置き換えていくことが必要になる。今回は、授業者からあえて口声模倣を誘わなかったという指導の意図があったが、適切な文で聞かせるなどの配慮も考えていかなければならないだろう。

③ 5歳児の授業についての話し合いについて

5歳児の授業についての話し合いの中で、話し合いにおける子ども同士のやりとりについての意見があった。

授業者からは、話し合いにおいては、できるだけ子どもたちから出てきた話題を取り上げ、教師が意図をもって話し合いに参加しながら子どもたちの話し言葉によるやりとりの力を育てることを大きなねらいの一つとして取り組んでいるという話があった。

話し合いについて、庄司(2010)は、「同年齢の学級集団であっても様々な要因で言語発達においても認知発達においても実態差が生じるため、その差に応じて臨機応変に指導を展開することが求められる」と述べている。また、鈴木ら(2011)も、「発達段階等

の実態差を考慮した上で指導にあたることが重要である」と述べており、聴覚障害教育において幼児期の実態差への対応が重要であることがわかる。

今回取り上げた5歳児学級での話し合いの中で、授業者から「言葉の理解面や表出面、興味や関心などの個人差に配慮して全員で共有できる話題を選択しており、話し合いを通して、子どもが友達や教師と伝え合うことを喜び、やりとりを楽しめるよう進めている。」という話があったことから、子どもの実態差や個人差に配慮しながら話し合いを行っていることが確認できた。

また、授業者に対する意見や質問の回答として、「子どものやりとりを促したり、子どもに考える時間を作ったりするために、あえて間を取るようになっている。」「間を取ることで、教師自身が子どもに話したことが伝わったか、伝わっていないとしたら教師が使った言葉などの表現が子どもの実態に合っていたかを吟味することができる。」という話もあった。そうした配慮をすることで、より子どもの実態に合ったやりとりにつながっていくと考えられる。

その他に、授業者からは、3歳児から現在までの取り組みについての説明があった。「3歳児では、子どもとの関係づくりをするために、子どもの気持ちに共感して、表情や指さし、身振り、言葉などで全員にわかるように応じてきた。」との話があり、こうしたかわりを通して、子どもは思ったことを教師に自分から伝えようとしたり、教師が話すことをわかろうとして聞いたりするようになっていくと考える。「4歳児では、子ども同士でうまく気持ちを伝え合えない様子が見られていたため、子どもの気持ちをくみ取り、一人一人が教師にわかってもらえたと実感できるように、言葉や声に身振りや表情などを付けて応じてきた。」との話では、新しい環境に戸惑ったり、子どもたちの気持ちが育ち一人一人の主張が強くなってきたという背景があった。筑波大学附属聾学校・幼稚部(2004)は、「幼稚部3年間の子どもの姿」の中で、「4歳児は、目の前のことについてはスムーズに話し合えることが増えるが、それ以外では一方的に話し、大人に聞いてもらうことで満足しやすい時期である。」と述べている。このように、伝えたいことが

うまく表せず、焦れたり残念そうな表情を見せたりすることもあるが、教師が子ども同士のやりとりの間に入って話を聞くことで、子どもの気持ちが満たされているのではないかと考える。その上で、子どもの言いたいことを最後まで言い切らせたり、「いつ～?」「誰と～?」「どこで～?」などと具体的に尋ねたりして、子どもの気持ちを捉え言葉に置き換えて伝えることで、相手に伝わる喜びや楽しさを感じることができるようにすることが大事だと考える。「5歳児では、思ったことや考えたことが友達に伝わるように、ゆっくり話したり、身振りを付けたりするなど、伝え方を工夫するように促している。また、話を聞いてわからなかった時に『もう一回言って。』などと聞き返したり、友達に確かめたりすることを促している。」との話があった。これら3年の取り組みを通して、現在の5歳児学級の子どもたちの実態があるということ全体を確認した。

6. おわりに

授業研究会の中で、受け持ちの学級の現状と指導についての悩みを発言したことで、経験年数の豊かな担任外の教師の経験を踏まえた考えや指導方法、実践例といった話が出るなど、活発な話し合いになった。

3歳児の授業研究会を通して、はじめて幼稚部の担任をする教師が、日頃から子どもたちへの指導の難しさを感じていたり悩みを抱えていたりすることがわかった。また、経験年数の浅い教師同士で、それぞれの学級の子どもの状態や指導についての話をすることで、互いに思いや考えを改めて共有したり、経験年数の豊かな教師の考えや指導方法を聞いたりできたことは、今後の指導実践に活かすことができると考える。今回は、経験年数に限らず、幼稚部全体で話し合えたことで、聴覚障害教育に関する専門性の確認や向上、継承につながる研修になったと考える。コロナ禍で日頃から授業を参観し合う機会の少ない現在、他の教師からの質問や意見は大変貴重である。特に、経験が豊かな教師の実践に基づく考え方や具体的な指導方法に関する助言は、経験の浅い教師にとって専門性を身に付けていくために有意義だと考える。また、3歳児から5歳児までの3年間を持ち上がりで担任を

する場合もある。そういった教師のこれまでの指導実践を全体で共有することで、子どもの発達に関して見通しをもって考えることができたのではないかと思われる。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得ている。

〔参考文献〕

- Harry Knoors & Marc Marschark (2014) Language Assessment Teaching. Teaching Deaf Learners : Psychological and Developmental Foundations. Oxford University Press, America, 村瀬忍(2018) 言語のアセスメントと指導. 四日市章・鄭仁豪・澤隆史・Harry Knoors and Marc Marschark (編), 聴覚障害児の学習と指導 発達と心理学的基礎. 明石書店, 111-143.
- 岡辰夫(1986) 発音・発語指導. 宮野忠夫(編), 聴覚障害幼児指導の基本と実際. 聾教育研究会, 97-98
- 庄司和史(2010) 聾学校幼稚部における「話し合い」活動. 教職教育, 3, 45-71.
- 庄司和史(2016) 特別支援学校(聾学校)の「話し合い」活動の基本技術に関する研究. 13
- 鈴木恵利子・関根英子・日高雄之・松本末男・左藤 敦子(2011) 「話し合い」活動の展開における教師の役割について -聾学校幼稚部 5歳児学級の授業事例の検討-. 筑波大学特別支援教育研究, 5, 11-19.
- 筑波大学附属聾学校・幼稚部(2004) 幼稚部3年間の子ども姿. 聾教育研究会
- 文部科学省(2018) 幼稚園教育要領解説.